

わが『知の技法』（敬語考Ⅱ）

中 村 龍 兵

How I learn to teach

NAKAMURA Ryuhei

• 2年目へ

新しい学部採用された社会人出身の新教員。何もかもが未経験のことだらけだが、2年目に入って急に忙しくなったのを感じる。と言うより、初年度が楽すぎたので、これからようやく大学教員らしいことが始まったに過ぎないということを改めて知らされたというに過ぎないのだが。

何せ1年目は授業らしい授業といえば、入学してきたばかりの大部隊、1年生が対象の共通科目、「日本語表現」がひとコマだけで、他の専門科目は「マスコミ論」「社会と教育」というのがあり、ゼミナール1クラスとあるが、これらはいずれも少人数の3年次編入生だけが対象の、打ち明けて言えば科目名はあるものの実際に開講してみればごく少数の学生しか集まらないものでしかない。私のゼミナールに「来てくれた」学生はただ一人だった。

そういう状態では別に手を抜くわけではないが、緊張感に欠けあまり授業らしい授業にはならないというのが正直なところである。ただ責任の授業回数だけどうにか埋めた。

• 「基礎演習」の経験

2年目に入って、その状況がかなり変わった。まず2年生対象の「基礎演習」が始まった。これはゼミの準備段階とでもいうのか、教員一人につき20人の学生を受け持たされ、ゼミ授業の導入教育を行う。教務委員会からガイドラインのようなものが示されたが、実際の運用は個々の教員の工夫に任された。私の学生時代——それは約40年も前だが——受

けた教育ではそれらしき授業はなかった。だからこの授業についてはまったく一から組み立てねばならなかった。まったく手探りで「基礎演習」なるものに取り組むことになった。

教務部から示されたガイドラインらしきものは、私が実施するには私の関心領域からは大きくかけ離れていた。結局、この授業は自分でやれるようにやるしかないらしいと腹を決めた。何とか参考にできそうだと思うもので私が手にしていたのは、大学改革が始まったころ東大教養学部が発行して評判になった「教科書」——『知の技法』である。

東大で使われている「教科書」を手がかりに私にとってまったく未知の授業「基礎演習」を組み立てようとした、と言ったら、なんと向こう見ずな、というか、足元を省みない暴挙と誹られるであろう。なんてったってテキは東大である。このごろ、そこで教えていたジャーナリストがその「学力低下」ぶりをあげつらった本を公刊したとはいっても、その言うところの「学力」の中身をどのように定義しようと、私の大学の学生たちの学力と東大生の学力とは雲泥の違いがあるのはいうまでもない。

だが、それは何も東大で使われている「教科書」をわが大学でも教科書として使おうというのでない。そもそも『知の技法』が教科書ないし「サブテキスト」として使われるものとして編まれたということはこの本にも書かれているが、東大の基礎演習が実際にはどのようなものであり、このテキストがどのように使われているかを私は知らない。

『知の技法』そのものの実態は、筆者である東大教養学部の教官たちが、それぞれの関心、研究主題に沿って思い思いの知のトレーニングの実際を展開しているもので、それをすべて「理解」するようにはなっていない。実際、私自身がそれぞれの論文を解読できているわけでもない。ただ、その第③部「表現の技術」は基本的な、そもそも「表現するに足る議論とは何か」で問題意識の持ち方から始めて、研究材料の集め方、調査の仕方、論文へのまとめ方、発表の仕方などをあえて初心者向けに泥臭いほど懇切丁寧に記し、それは私の大学の学生諸君にも十分理解可能なものであり、少なくとも応用可能なものだと考えた。

知への接近の仕方は何よりもまず実際に試みてみるより仕方がない。「畳の上の水練」では何も身につけられない。まだジュニアの段階の学生たちにとって『知の技法』に書かれていることはそれ以前かもしれない。だが、実際に何らかの調査を始めてみて、問題にぶつかれば、そこに書かれていたことが参考になるかもしれないと思い返すことがあるかもしれない。それにかすかな希望をかけて、「基礎演習」のはじめに私は『知の技法』のできるだけ具体的な方法を解説している部分のコピーをとって学生たちに配った。

私の「基礎演習」の具体的な運営は、とにかく何の主題でもいいし、どんな方法をとってもいいから何かを調べる、調べた結果をどんな形でもいいからまとめる、ということをやってみようということだった。それはある意味では小学校や中学校での「調べ学習」というものになるのかもしれない。しかし、それであっても、最近文部科学省が懲憚してい

る「総合学習」を経験していない今の大学新入生たちに、教えられたことをひたすら覚える以外の学習を経験させてみるということであった。

それともう一つ、その学習をグループを組んでやってみる、ということも注文した。学習というものが、しょせんは「てんでしのぎ」で個人個人の評価点に集約される受験勉強型以外の学習を経験してみる、というねらいからであった。もっともこれには教授者として多少ずるいもくろみも含まれていて、これは学生たちから早くから見抜かれていたが、どうせ熱心な学生と、そうでない、他人に負ぶさり型の学生とができるに決まっているから、全体としては一部の熱心学生に依拠しつつ学習を進めようと思っていたのである。

何だかだと理屈はつけてみるものの、そのような運営はもともと小中学校で行われていることではないかと思わぬわけでもない。私自身の小学校時代は、第二次大戦直後の米占領軍の指導による「問題発見」「課題解決」型の学習方法が称揚され、グループ学習も推奨されて、先生たちが割とまじめにそうした方法を模索していた、今になってみれば例外的な学習方法が試みられていた時代であった。結局はそうしたやり方は日本の教育現場になじまぬものとして放棄され、日本の学校教育は上級学校への受験教育に適したやり方にひたすら身を添わせていく。たまたま自分が大学で教える立場になって、かつて放棄されたそのやり方を改めて試みってみるというのはどういうことなのか、と思わぬでもない。

さて、その結果はどうだったのか。実は大変な苦戦を強いられている、というのが、これを書いている2年目の後期、11月の時点での中間報告とならざるを得ない。まったく思えないかもしれない学生たちの反応に遇って、目算違いを悩んでいる。

何でもいい、どんな方法でもいいからとにかく何か自分たちの手で調査したオリジナルな結果を目指せ、ということで始めたのだが、最初に悩まされたのは、学生たちの極めて悪い出席状況だった。出席ぶりが極めて不安定で、往々にして出席者がクラスの半数程度、それも遅刻が多いから、一度説明したことが学生たちに通じているかどうか分からない。何度も同じことを繰り返さねばならなくなる。「基礎演習は2年生で単位を取っておかねば、3年生からのゼミナール、4年生の卒業研究を受けられなくなる。卒業できなくなる羽目に陥る」と何度も繰り返したが、気がついてみると欠席者は決まったメンバーで「まあ毎回出てきている人に同じことを言っても仕方がないのだが…」ということになる。

とにかく出席してきた顔ぶれに何を調査してみたいかと希望を募って、それを集約して20人のクラスを4つのグループに編成するまでになったのがようやく Semester 前期の終わりごろ。やはり思ったとおり、私の意図に答えようと熱心なメンバーが各グループにいるので、その学生たちに依拠して各グループの活動状況を報告させて、それを前期の成績評価に使った。

そんなやり方でも、とうとう前期の終わりには出てこなくなった学生が3人出た。夜、自宅に電話して出席を促すはめに陥ったが、「次回には出ます」と電話では言ったもののい

ずれも教室には現れず、他の授業への出席状況も悪いようなので、前期の単位は与えられなかった。

学生の実態に合わせて、授業を進めることを当初からの方針にし、その中で出来得ることを精一杯やろうと思っているが、授業に出てこなければ手の打ちようがない。「日本語表現」の授業をもとに書いた『「敬語」考Ⅰ』では大学で教えることの幸福感を報告したが、この時期ではまだまだ考えねばならないことがあるのに気づいて、ちょっと自己嫌悪に陥った。

教員同士の会議でよく出る話題なのだが、「自分の希望を生かして」とか「何でも好きなことを選んで」と言われると、学生たちの頭の中は真っ白になってしまうらしい。定型的な課題、たとえば何らかのテキストを示して、それについて「感想を書け」というような要求については反射的にこたえようとする。こちらの問うているポイントから全くはずした答え、あるいはテキストそのものの丸写しであっても、とにかく外形的に要求された作業には従順に応じる。

私が「基礎演習」でやろうとしたこと、学生に求めたこと（いやむしろ求めなかったこと）は、そんな学生たちにとっては最悪であったのかもしれない。教師は自分たちになすべきことを何も示さない。課題を自分で探し出せと言う。俺たちには自分で知りたいことなんか何もない。今の世の中、情報なんてそこら中にあふれている。それを選択すれば良いだけだ。学校では問題を出すのは教師なのだ。問題を自分で作って自分で答えるなんて、そんな八百長は出来ない…。

学生のほうからすれば「基礎演習」の授業に出ても、その時間にやることがはっきりしない。どうやら授業で教師が言うことを聞いていなくても、後で定期試験にその事が出題されて困るということはなさそうだ、と見極めがつくと、それほど一生懸命に出席しなくても——ということで、出席率はどんどん悪くなる。夏休み前、前期の終わりはそんな悪循環にはまり込んでいた。

しかし、初めから成算があったわけではないが、どうにかそのころには目鼻もついてきた。一人一人の「調査してみたいこと」の希望を黒板に列記して、「この人とこの人は一緒にやれるんじゃないか」というアドバイスをしてグループに絞り込んでいく作業を続けていく。欠席が多いのに悩まされつつ、何とか辛抱しているうちに、熱心でリーダーシップが取れそうな学生を中心に、どうやら4つのグループに分けられるめどがついてきた。4グループともリーダーは女子学生だった。

さっきも言ったようにまだ途中なので、詳細は書けないが、形の上では後期の末には4つの調査レポートが最低限、出来上がる見通しである。前期の出席がかんばしくなくて単位を落とした3人のうち1人が後期は出席するようになった。

また、こんなこともある。仲の良い女子学生2人を核にしたグループで、2人の男子学

生がお情けで加えてもらっているのがあるが、その男子学生の1人、今仮にX君とすると、彼は授業ではほんとに目立たない存在だ。よく休むし遅れて出てくる。このグループはよくパソコンのある部屋でインターネットを使って情報集めしているが、それにつきあっても他の学生たちと十分な話し合いをしているようには見えない。そもそも意思表示がはっきりしない。

そのX君を学園祭の演劇同好会の芝居に出演しているのを見た。準主役格で活躍していた。声もはっきり出ていて、授業での印象とはまるで違う。別人かと思ったが、芝居宣伝のビラにはちゃんと彼の名前が出ている。学園祭のあと廊下で彼とすれ違った。「芝居見たよ」と言うと、少し照れていたがその顔は準主役の自信に満ちたほうだった。以来、授業でも話を交わすようになった。

考えてみれば「基礎演習」で私が目指したような授業をするためには個々の学生をもっと知らねばならないようである。シロウト教員としてはそんな反省をした。授業を作り上げるためには長い辛抱の時間が必要で、何より学生たちとのコミュニケーションをつくり上げることが必要だ。当たり前と言えは当たりのそんなことをあらためて感じて、私はいくらか展望が開けてきたような気がしている。

来年度から15人の学生を対象にしたゼミナールがいよいよ始まる。2年生の基礎演習は3年生からのゼミナールへの導入だと言ったが、それは学生たちにとっての導入というより、私にとっての教訓多い試行の期間を与えてくれた、と言うべきなのだろう。

• 「対テロ戦争」の衝撃

長い夏休みも終わりに近づいて、怠惰な学生時代と同じように、そろそろ後期の授業の準備も考えねばならないと思い始めたころ、アメリカでの「同時多発テロ」が起きた。9月11日。現地では朝の出来事だったが、日本時間では夜。実は翌12日、私には朝早く出かける仕事があった。そのため早く就寝して事件を知ったのは12日の朝になってからだった。

朝早く出かける仕事と言うのは、卒業研究の指導をしている4年生のY君が教職資格取得のため教育実習に行っている滋賀県の私立高校へ出向いて、その研究授業を見学すること、かたがたお世話になっている高校側へ大学として挨拶することであった。私の自宅に最寄のJR駅から快速電車に乗れば1時間と少しでその午前の研究授業に間に合う。それで早寝したのだが、起きて朝刊を見て驚いた。あわててテレビをつけると、世界貿易センターの高層ビルに旅客機が突っ込むあの衝撃の映像を繰り返していた。

もう少しテレビを見ていたいと後ろ髪を引かれる思いであったが、校務をキャンセルするわけには行かない。タクシーを頼んであったこともあって、とるものもとらずにJRの

駅に向かった。実はこの夏、イチローの活躍を見たいがためにテレビを買って換えたばかりであった。出かける仕事があれば、たぶん一日中テレビにかじりついていたところだ。

「事件」のその後の展開は、ご承知の如くである。「テロの発生は世界の人々の考え方を変えた」という解説がもっぱらであるが、私自身の安逸な生活も少なからず影響を受けた。そして、まもなく始まった後期の授業の中身も。

生活に対する影響のほうからいえば、夜遅くまでインターネットでネットサーフィンする癖がついてしまった。英米の新聞、フランスの新聞、かろうじて理解できる英語、フランス語の新聞の電子版を渡り歩いて時間を消費する。大まかな事実関係の推移を知るだけなら日本語の新聞、さらには雑誌の類で事足りるし、私の英語、フランス語の理解力からすれば時間の無駄という気がしないでもないが、それでもいったん始めた習慣がやめにくくなっているのは、アメリカの大統領が「戦争」を宣言して以来のアメリカの新聞の論調、それに引きずられる日本の新聞だけでは、事態を冷静に眺められないのではないかと感じているからだ。

宮沢喜一氏が日本のある新聞のインタビューに「もっと冷静に考えたほうがいいんじゃないか。アメリカは歴史の浅い国だし、理解は出来るが騒ぎすぎの感無きにしもあらず」というふうなことを言っていたが、私も日本人としては、広島原爆で亡くなった人は26万人でっせと彼らに言ってやりたい気がする。

長い歴史の体験を踏まえて、イギリスやフランスの新聞が、“America at war”一色のアメリカ・ジャーナリズムから離れた視点をどう表現しているか、同時進行的に押さえておきたいと思った。事実関係以外に論評、コラム的な読み物でそれらの事実をどう表現しているか。

授業のほうへの影響ということでは、まともにその変化を反映したのは今年度から2年生以上への開講ということになった「マスコミ論」である。昨年度は対象が人数の少ない3年次編入生だけだったが、今年度は一気に受講者が増えた。70人以上の受講登録があり、どのように授業を進めるか頭をひねったが、結局、一方的に私が講義する形しか取れないと決めた。教室はビデオ、大型スクリーン、OHPなども完備した最新のマルチメディア型のものが割り当てられたが、残念ながら私にそれらを駆使する能力がない。

授業のたびに配るプリントに工夫をすることにした。それは前回述べた「日本語表現」と同一のやり方であるが、材料は最近の新聞記事の切り抜きから採ることにした。私は自宅で2紙購読しているが、日常的に授業に使えるような記事はファイルしておく。そのファイルから必要に応じてセレクトし、共同研究室付の職員に手伝ってもらって縮小コピーしたり按配してA4版1枚裏表のプリントを作る。学生たちの話を聞いてみると、親と暮らしている自宅通学生でも、日常的に新聞に目を通す習慣を身に着けているものが少ない。下宿しているもので新聞を購読しているのはほぼ皆無といった状況である。新聞の切抜き

が十分新鮮な材料提供になる。

とってただ漫然と目についた記事を提示するだけでは、テレビ番組の中の時事解説の下手な真似事になってしまう。生の新聞記事を見せ、それを材料に、マスコミ論、すなわちメディアの問題点を指摘していくというのがねらいである。幸い、最近の新聞はメディアの問題をニュースソースとして積極的に取り上げる傾向にあり、「新聞時評」のようなコラムを設けて社外の有識者に紙面に対しての論評を仰いだり、またそうした有識者を委員に委嘱して倫理委員会、人権委員会のようなものを設け、そこでの議論をかなりのスペースを割いて報告したりしている。海外の一部の新聞が実施しているオンブズマン制度に準ずる役割を期待してのものであろう。少なくともメディアのうち新聞は、その制作過程での問題点を積極的に読者に開示して理解を得ようという姿勢が顕著である。

そのことが新聞をめぐるさまざまな問題点について読者の納得が得られているかどうかとなると、それほど楽観的になれないが、少なくとも私の「マスコミ論」授業には好都合な材料を提供してくれている。前期の授業では、当時の森首相と記者たちとの関係、「メディア・スクラム」と称される過剰報道の問題、田中真紀子外相問題、大阪府池田市の小学校での児童殺傷事件をめぐる問題化した精神障害者による犯罪のさいのメディアの実名扱い、ひいては田中康夫・長野県知事が問題提起した記者クラブ問題などと取り上げており、とにかく授業の材料に困らない状態だった。

だが「同時多発テロ」の発生が、後期に入ってこうした授業のあり方をがらりと変えてしまった。テロとそれに続くアフガニスタン空爆関連の記事が新聞紙面の大半を占めている状況で、新聞記事の切り抜きに依拠する私の授業がその話題に引きずられるのは致し方ない仕儀ではあるのだが、正直言って、なにより私の関心がそちらに傾いていることが授業の方向を変えてしまったといわざるを得ない。

出来るだけメディアの問題に引き寄せて、テロの問題からアフガニスタンが舞台の「戦争」を語っていったが、私の関心に応じてややニュース解説ふうに流れていったと学生たちに受け取られても仕方がない部分も多々あった。この授業では各回の講義の後、メモ用紙を配って、学生たちの意見を自由に記述してもらうことにしているが、ある時「テロ以外の、たとえば狂牛病の問題なども取り上げてください」という要望も書かれていた。

しかし単なるニュース解説に陥らないためにも、逆に「対テロ戦争」を通じてのメディアの問題を講義していくことにしようと思っている。実際、現代の「戦争」は何よりメディアを通じての戦争である。ベトナム戦争の時には戦場にテレビカメラが従軍し、お茶の間に直接戦場が持ち込まれたと言われ、それがアメリカに反戦の気分をかきたて、アメリカが撤退せざるを得ない事態に追い込まれたとされる。その「反省」が「任天堂ウォー」と呼ばれるような、まるでテレビゲームさながらの映像を氾濫させる「対策」を軍に採らせた。

そこにいくと、アフガニスタンを戦場にした今度の「戦争」はまた違ったイメージを生み出すものになっている。「非対称型」といわれる戦争は米軍の圧倒的な戦力のもと、もともと廃墟同然の町や村をきりもなく荒廃させていく爆撃が続き、ぼろをまとった飢えた人たちが徘徊し、鼻じろむ思いさえ抱かせる。

その陰で過酷な体験を強いられているのがメディアで働く者たちである。これを書いている11月下旬の時点で殉職した記者たちが7人に達するという。そのほとんどは戦闘に巻き込まれたというより、荒廃した風景さながらに治安の能力を失った国家にあって、横行する山賊のようなやからの犠牲になったものらしい。国家と国家の対決といった古典的な戦争においては、「従軍」の記者たちは、それぞれの陣営の保護を受け将校なみの待遇を保障されたようだ。ここではそんな常識は通用しない。これは全く戦場におけるメディア人の新しい形ではないのか。

私自身、新聞記者という仕事についていたが、平和憲法下、自国内ではもちろん、国外でもそうした体験を持たないで済んできた。だから学生たちに語るべき体験は全くない。しかしそれは例外的に幸せな時代に生きたためであったと彼らに告げるべきなのであろうか？

（未完）

*

『「敬語」考』の題名のもとに、いわゆる「社会人」の立場から大学で教えることになった者の体験を通じて、大学教育とはどの点で成り立つのかを考えてみる、というのが本稿の目的である。今回はその2年目の報告をするつもりであったが、紀要の締め切りの関係で、授業がまだ続行中のところで稿を草することになった。体験がまだ記憶に新しいうちに書き留めておくというねらいもあって、不恰好ではあるが未完のままとりあえず提出しておく。今後も機会が与えられればこの形で書き続けるつもりである。